

子育てにおける親の省察尺度の作成に関する予備的研究

朴 信永¹・杉村伸一郎²

A pilot study of constructing a parental reflection scale in child-rearing

Shin-Young Park¹, Shinichiro Sugimura²

The purpose of this study was to construct the parental reflection scale at the base of the three-layer model of reflection. The scale comprised of 32 items covers the following three parts; reflection on themselves (PR) and on their child (ren) (CR) by parents, and reflection on themselves through other person (s) (OR). The questionnaire, which included scales for self-consciousness / self-reflection, parent-child relationship, motherly consciousness, child-care attitude, was responded by 55 parents. Although each part of the parental reflection scale consisted of three levels, factors analysis indicated a one-factor-structure for each part. Cronbach's alpha coefficients for reliability were sufficiently high for PR and OR, and 3 sub-scales of PR, CR, and OR indicated their positive relations to the self-reflection scale. These results suggest that validity of this scale is partially satisfying but the scale itself was hardly correlated with other parenting scales except the child-care attitude scale.

Key Words : parenting, parental cognition, parental reflection scale

近年、親の認知に関する研究が盛んに行われ、子どもを産み育てる行為の背後にある親の認知過程に注目が集まってきた。さらに、親自ら自分の認知過程を対象にして考えるメタ認知 (Main, 1991 ; Fonagy, 1996 ; 窪田, 2002) や省察 (宮内, 1998 ; 高橋, 1998 ; 安見・秋田・鳥井・小林・寺田, 1997 ; 吉村・吉岡・尾形・田代, 1996) に関する研究では、親が自分の内面に目を向けることが、子どもだけでなく、親自身にも望ましい変化をもたらすと示唆されている。しかし、現時点では、親の省察を具体的に取りあげ子育てで支援に直接つなげるような実証的研究がきわめて少ない。このような状況では、省察の重要性について述べられても、親たちを支援する側も、親自身も、具体的にどのように

すればよいかわかりにくい。よって、親が省察により変わったとしても、研究者側は、どのような変化であったのかを明確に説明することが難しく、親側も、支援や研修を通して省察するよう促されても十分自覚できない。

そこで、子育てのどのようなことについて、どの程度省察するのかを測定する尺度を作成することが必要になると考えられる。それによって、省察の構造や機能を明らかにしていくことが可能になり、今後の子育て支援に役立つ知見が得られるであろう。また、親自身も省察尺度を利用することにより、客観的に自己の省察スタイルを把握することができるようになり、子育ての改善が促進されるであろう。

本研究では、朴・杉村 (2006) によって提案された子育てにおける省察の3層モデルに基づき、省察尺度の各項目を作成することにした。モデルでは以下のような点が明確に区別されている (図1参照)。

1 広島大学大学院教育学研究科博士後期課程
2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

第一は、省察の対象である。子育てにおいて日常の出来事は、親と子どもの相互作用をとおして起きるので、親だけに関する情報と、子どもだけに関する情報というように分離することは難しい。また、今までは省察における判断材料として自分自身に関するもの、子どもに関するもの、他人からの情報などが混ざって問題点を特定することが難しく、より細かい検討が困難であった。しかし、概念的には明確に区別することができ、実際これまでの研究においても、親のメタ認知に関する研究では親に関する情報を中心に、親のモニタリングに関する研究では子どもに関する情報を中心に扱ってきた。

そこで、省察の3層モデルでは省察に用いる情報を、親自身の態度や言動といった「親自身に関する情報」、自分の子どもの表情や行動といった「自分の子どもに関する情報」、他の親の子どもへの接し方や他の子どもの様子といった「他の親や子どもに関する情報」の3つに分けている。この3つの側面は、「外的情報」とそれに対する「1次的省察」のレベルだけでな

く、より上のレベルにおいても区別することはできるが、レベルが高くなるにつれて3つの側面は統合されていくと考えられる。

第二は、省察の循環過程における認知のレベルと、省察が及ぶ時間の範囲である。保育の省察に関する研究では、保育当日の省察と翌日や日が経ってからの省察が区別され、時間の経過とともに思考がより抽象化・一般化されていくと考えられている。しかし、子育てにおける省察ではこのような点が十分考慮されていない。そこで、省察の3層モデルではSchön (2001)の「行為中の省察」も含め、子どもと向き合っている場での気づきとよべるような省察を1次的省察、当日のうちに分析・評価する省察を2次的省察、より長い間蓄積され価値観が変わるような深い省察を3次的省察とよび省察のレベルを区別している。

第三は、他者をとおした省察である。子育てにおいては、育児書や雑誌から情報を得たり、直接他の親子の行為を目にし、会話を聞くことによって、自分の育児へ活かすことがある。ま

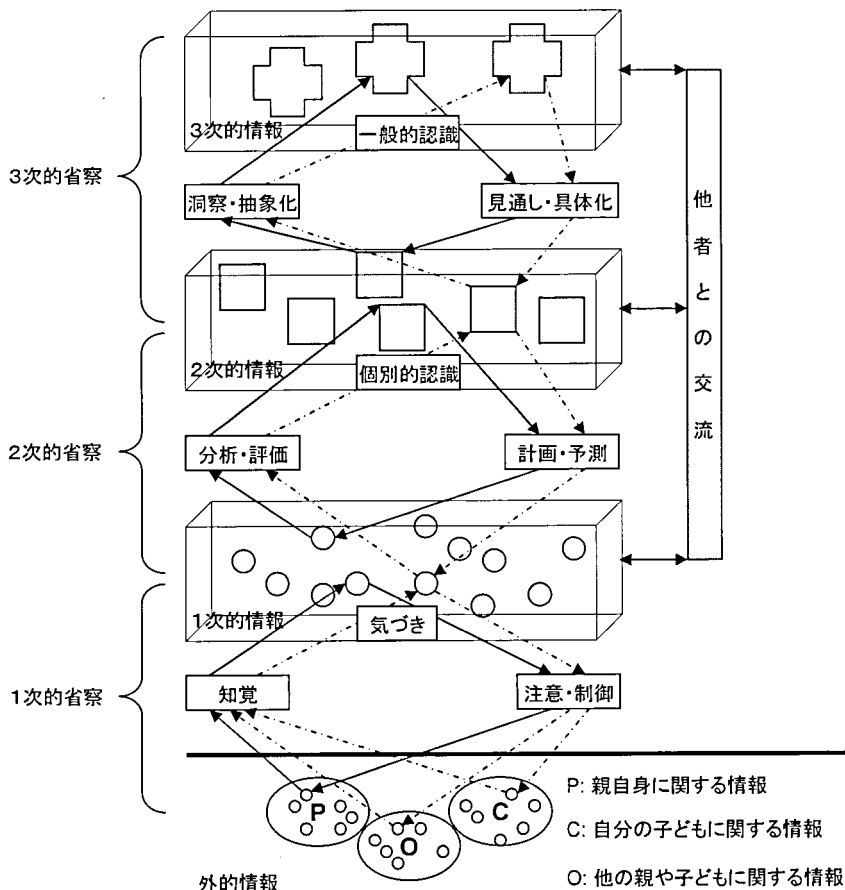


図1 省察の3層モデル (朴・杉村, 2006を一部改変)

た、子どもを育てている親同士のコミュニケーションを通して、子育てに関する有用な情報を交換したり、子育てにおける様々な問題の解決を模索することもある。前者は、他の親や子どもに関する外的情報の参照、後者は、積極的な交流を通して自分の子育ての長所・短所に気づいたり、自分自身の子育てを振り返り自己評価することといえる。他者の参照や他者との交流といった他者をとおした省察は、子どもとの相互作用だけに注意を払ってしまいがちな現代の親において特に重要であり、親の省察において欠かせない要素と考えられる。

本研究では、以上のような子育てにおける省察モデルに基づいて、親の省察の個人差を測定する尺度を作成し、その尺度の信頼性と妥当性を検討するとともに関連要因との関係を明らかにすることを目的とする。

方法

対象者と実施時期 2006年11月、東広島市内のA幼稚園で3歳～5歳の子どもをもつ親を対象に95部を配布し1週間後に回収した。分析の対象となった親の総数は55人（回収率57.9%）であり、平均年齢は、35.7歳（範囲：26～43歳、 $SD=3.44$ ）であった。また、子どもの数が1人である家庭は21.2%、2人である家庭は50.0%、3人以上である家庭は28.8%であった。

質問紙の内容 子育てにおける親の省察を測定するために、まず、子育てを対象にした省察に関する質問項目をできるだけ多く作成した後、親自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察の各領域に分ける作業を行った。一つの領域において150以上の項目が集

められ、さらに、行動や、認知、感情に関する省察に分類したり、行為前や、行為中、行為後の省察に関して分類することによって項目作成が特定の心理的過程に偏らず、多様な省察過程がくまなく含まれるようにした。

その後、省察の3層モデルの各レベルと対象に基づき、3つの領域のレベルごとに4つの項目を選んだ。ただし他者をとおした省察項目においては、交流自体が情報源として扱われるため細かい分類はせず8つの項目を選ぶことにした。最終的に、親自身に関する省察12項目、子どもに関する省察12項目、他者をとおした省察8項目を作成した。回答は「1. まれに」「2. たまに」「3. ときどき」「4. よく」「5. いつも」の5段階評定であった。

また、親の省察の妥当性を確認し、関連要因との関係を調べるために、辻（2005）の自己意識・自己内省尺度の中から自己内省に関する6項目、自己反省に関する5項目、内的状態の意識に関する4項目、新井・高野・庄司・丹羽・藤生・浜口・尹・小林・広田・谷島（1993）の親子の認知面からの親子関係尺度を幼児用に変えた10項目、大日向（1988）の母性意識尺度12項目、戸田（2000）の養育態度尺度12項目を加え、質問項目は全部で81項目であった。加えて、各対象者へ結果のフィードバックが行えるように回答の控え用紙を配布し、各々の親が結果を確認し全体の平均と比較・対照できるように配慮した。

結果

まず、親の省察に関する32項目の平均値と、標準偏差を算出した（表1, 3, 5）。各項目

表1 親自身に関する省察（PR）の因子分析結果

レベル	項目	負荷量	共通性	平均値	SD
2	PR11 子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある	.87	.76	3.45	1.05
3	PR 6 「子どもを育てる」とはどういうことか考えることがある	.87	.76	3.02	1.18
1	PR 7 子育てにおいて自分の振る舞いに目を向けることがある	.82	.67	3.33	1.00
3	PR12 子育てについて自分の長所・短所を考えることがある	.79	.63	3.13	1.22
1	PR10 子どもに対する自分の言動に目をとめることがある	.73	.53	3.25	1.06
3	PR 9 自分の子育ての方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	.70	.50	3.35	1.11
2	PR 8 子どもに何か言う前に、自分の言動や態度の影響を考えることがある	.69	.47	3.20	1.06
1	PR 4 子どもと話するとき、自分の態度や言動に注意を向けることがある	.62	.38	3.18	1.14
2	PR 3 子どもに何か言った後、そのときの自分の感情について考えることがある	.60	.37	3.40	0.89
3	PR 5 自分の長所・短所を踏まえながら子育てをしている	.57	.33	2.89	1.01
2	PR 2 子どもに伝えたいことがあるとき、どのようにしたらうまく伝わるか考えることがある	.56	.31	3.56	1.00
1	PR 1 子どもに何か言っているとき、ふと我に返ることがある	.18	.03	2.36	1.02
		因子寄与	5.74		
		寄与率 (%)	47.80		

表2 親自身に関する省察 (PR) の2因子構造 (直接オブリミン回転後の因子パターン)

レベル	項目	I	II	平均値	SD
3	PR 5 自分の長所・短所を踏まえながら子育てをしている	.94	-.35	2.89	1.01
3	PR 6 「子どもを育てる」とはどういうことか考えることがある	.79	.16	3.02	1.18
3	PR12 子育てについて自分の長所・短所を考えることがある	.75	.12	3.13	1.22
1	PR 7 子育てにおいて自分の振る舞いに目を向けることがある	.66	.25	3.33	1.00
3	PR 9 自分の子育ての方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	.53	.25	3.35	1.11
2	PR11 子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある	.53	.48	3.45	1.05
2	PR 8 子どもに何か言う前に、自分の言動や態度の影響を考えることがある	.51	.26	3.20	1.06
1	PR 4 子どもと話すとき、自分の態度や言動に注意を向けることがある	.46	.23	3.18	1.14
2	PR 3 子どもに何か言った後、そのときの自分の感情について考えることがある	.04	.75	3.40	0.89
2	PR 2 子どもに伝えたいことがあるとき、どのようにしたらうまく伝わるか考えることがある	.09	.62	3.56	1.00
1	PR10 子どもに対する自分の言動に目をとめることがある	.38	.47	3.25	1.06
1	PR 1 子どもに何か言っているとき、ふと我に返ることがある	.00	.23	2.36	1.02
因子間相関		I	II		
		I	-.52		

表3 子どもに関する省察 (CR) の因子分析結果

レベル	項目	負荷量	共通性	平均値	SD
3	CR 9 子どもの長所・短所を考えながら普段の行動を見ることがある	.67	.45	3.35	0.87
2	CR 8 子どもをほめたり叱ったりする前に、子どもがどう受けとめるか考えることがある	.63	.39	3.09	0.99
1	CR 5 子どもと接しているとき、子どもの行動に注意を向けることがある	.62	.39	3.75	0.70
1	CR 7 子どもの言動に目を向けることがある	.57	.32	3.98	0.71
2	CR11 子どもがどう変わってきたか考えることがある	.47	.22	3.49	0.88
2	CR 3 あらかじめ子どもの行動や態度を予想しておくことがある	.45	.20	2.84	1.00
3	CR12 子育ての出来事から子どもの本質について考えることがある	.45	.20	2.85	1.04
3	CR 4 子どもの将来を見通して育てている	.43	.18	2.51	1.36
3	CR 2 子どもの発達について考えることがある	.41	.17	3.15	1.21
2	CR 6 子どもをほめたり叱ったりした後、子どもの気持ちを考えることがある	.39	.15	3.75	0.91
1	CR10 子どもの話の中に子どもの感情を感じることがある	.26	.07	3.91	0.56
1	CR 1 子どもと話しているとき、子どもの表情や態度に注意することがある	.25	.06	3.69	0.84
因子寄与		2.80			
寄与率 (%)		23.35			

の平均値は、親自身に関する省察では、レベル2のPR 2, PR11, PR 3などが高く、レベル3のPR 5, PR 6などが低い。子どもに関する省

察では、レベル1のCR 7, CR 5やレベル2のCR 6などが高く、レベル3のCR 4, CR12, レベル2のCR 3などが低い。また、他者をとお

表4 子どもに関する省察 (CR) の2因子構造 (直接オブリミン回転後の因子パターン)

レベル	項目	I	II	平均値	SD
2	CR 8 子どもをほめたり叱ったりする前に、子どもがどう受けとめるか考えることがある	.65	-.03	3.09	0.99
3	CR 9 子どもの長所・短所を考えながら普段の行動を見ることがある	.55	-.24	3.35	0.87
1	CR 5 子どもと接しているとき、子どもの行動に注意を向けることがある	.55	-.17	3.75	0.70
1	CR 7 子どもの言動に目を向けることがある	.54	-.10	3.98	0.71
2	CR 3 あらかじめ子どもの行動や態度を予想しておくことがある	.53	.08	2.84	1.00
3	CR 2 子どもの発達について考えることがある	.48	.06	3.15	1.21
1	CR 1 子どもと話しているとき、子どもの表情や態度に注意することがある	.43	.24	3.69	0.84
2	CR 6 子どもをほめたり叱ったりした後、子どもの気持ちを考えることがある	.41	.00	3.75	0.91
3	CR 4 子どもの将来を見通して育てている	.32	-.22	2.51	1.36
2	CR11 子どもがどう変わってきたか考えることがある	.01	-.97	3.49	0.88
3	CR12 子育ての出来事から子どもの本質について考えることがある	.14	-.58	2.85	1.04
1	CR10 子どもの話の中に子どもの感情を感じることがある	.22	-.10	3.91	0.56
因子間相関		I	II		
		I	-.26		

した省察では、レベル1のOR4、OR1などが高く、レベル3のOR2やレベル1のOR7などが低い。平均値±1SDを基準に項目分析を行ったところ、天井効果やフロア効果は見られなかった。そこで、全ての項目を用いて、下記のように、親自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察に分けて主因子法による因子分析を行った。

1. 親自身に関する省察（以下、PR）の因子構造の検討

12項目に対して主因子分析による因子分析を行った結果、固有値の変化(6.18, 1.23, 1.05, 0.82, …)と因子の解釈可能性を考慮すると、1因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度1因子を仮定して主因子法による因子分析を行った。その結果、表1のように共通性が低く十分な因子負荷量を示さなかった1項目(PR1)を今後の分析から除外することにした。11項目間の内的整合性についてはCronbachのα係数が.92であり、十分信頼できる尺度であると考えられた。内容的には省察の3層モデルに基づいた省察の3つのレベルを含んでいるものの、今回の結果から「親自身に関する省察」と

いう1因子で解釈することが適当であると考えられた。念のため、2因子を仮定し主因子法・オブリミン回転による因子分析を行った(表2)。回転前の2因子で12項目の全分散を説明する割合は61.71%であった。分析の結果、負荷量が2つの因子にまたがっている項目があったり、因子間項目数が偏っていた。また、3因子を仮定し因子分析を行った結果でも、負荷量が2つ以上の因子にまたがっている項目があったり因子の解釈が難しかったため、本研究ではPRを1因子構造とした。

2. 子どもに関する省察（以下、CR）の因子構造の検討

12項目に対して主因子分析による因子分析を行った結果、固有値1以上の因子が5つにもなった。しかし、固有値の変化(3.51, 1.55, 1.36, 1.11, 1.07, 0.94, …)と因子の解釈可能性を考慮すると、1因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度1因子を仮定して主因子法による因子分析を行った。その結果、表3のように共通性が低く十分な因子負荷量を示さなかった2項目(CR1, CR10)を今後の分析から除外することにした。10項目間の内的整合性

表5 他者をとおした省察（OR）の因子分析結果

レベル	項目	負荷量	共通性	平均値	SD
3	OR6 他の人と子育ての話をし、自分の子育ての方針を改めることがある	.80	.64	2.71	1.08
3	OR3 他の人と子どもに関するいろいろな話を聞いて、自分の子ども親を見直すことがある	.79	.63	2.98	1.09
2	OR5 他の人と話しているうちに、子育てに関する疑問が解決することがある	.69	.47	3.11	1.10
1	OR4 他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	.68	.46	3.20	1.03
1	OR7 他人の子どもの言動を注意深く見ることがある	.64	.41	2.84	1.03
2	OR8 他人の育て方をみて、今の自分の子育てに必要なことに気づくことがある	.58	.33	3.02	0.91
3	OR2 子育てに関する本や雑誌を読み、自分の子育て親と照らし合わせるがある	.55	.31	2.45	1.30
1	OR1 他人と子どもの話しをすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある	.54	.29	3.42	0.90
		因子寄与	3.55		
		寄与率(%)	44.36		

表6 他者をとおした省察（OR）の2因子構造（直接オブリミン回転後の因子パターン）

レベル	項目	I	II	平均値	SD
2	OR5 他の人と話しているうちに、子育てに関する疑問が解決することがある	.85	.13	3.11	1.10
3	OR6 他の人と子育ての話をし、自分の子育ての方針を改めることがある	.76	-.10	2.71	1.08
2	OR8 他人の育て方をみて、今の自分の子育てに必要なことに気づくことがある	.68	.08	3.02	0.91
1	OR7 他人の子どもの言動を注意深く見ることがある	.55	-.13	2.84	1.03
1	OR4 他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	.46	-.27	3.20	1.03
1	OR1 他人と子どもの話しをすることで、自分の子どもの特徴に気づくことがある	.45	-.13	3.42	0.90
3	OR3 他の人と子どもに関するいろいろな話を聞いて、自分の子ども親を見直すことがある	.15	-.86	2.98	1.09
3	OR2 子育てに関する本や雑誌を読み、自分の子育て親と照らし合わせるがある	-.02	-.74	2.45	1.30
		因子間相関	I II		
		I	-	-.58	

表7 子育て省察の各尺度間相関および子育て省察の各尺度と自己意識・自己内省尺度との関連

	PR	CR	OR	自己内省	内的意識	自己反芻
親自身に関する省察 (PR)	—	.50**	.43**	.47**	.37**	.28*
子どもに関する省察 (CR)		—	.52**	.33*	.41**	.17
他者をととした省察 (OR)			—	.35*	.35*	.46**
自己内省				—	.63**	.55**
内的意識					—	.61**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表8 子育て省察の各尺度と子育ての関連要因との関連

	積極肯定母	消極否定母	親子関係	権威ある	権威主義
親自身に関する省察 (PR)	.26	.10	-.08	.02	.14
子どもに関する省察 (CR)	.11	-.05	.16	.33*	-.11
他者をととした省察 (OR)	.14	.20	-.06	.14	.14
自己内省	-.05	.05	-.19	.22	.02
内的意識	-.07	.25	-.07	.22	.31
自己反芻	-.17	.44**	-.21	-.01	.46**

* $p < .05$, ** $p < .01$

については α 係数が.74であり、信頼できる尺度であると考えられた。内容的には省察の3層モデルに基づいた省察の3つのレベルを含んでいるものの、今回の結果から「子どもに関する省察」という1因子で解釈することが適当であると考えられた。念のため、2因子を仮定し主因子法・オブリミン回転による因子分析を行った(表4)。回転前の2因子で12項目の全分散を説明する割合は42.15%であり、分析の結果、第2因子が2つしかなかった。また、3因子を仮定し因子分析を行った結果では第3因子がCR4の1つしがなく、4因子と5因子を仮定した因子分析は回転が不可能であったため、本研究ではCRに対して1因子構造とした。

3. 他者をととした省察 (以下、OR) の因子構造の検討

8項目に対して主因子分析による因子分析を行った結果、固有値の変化(4.07, 1.02, 0.92, ...)と因子の解釈可能性を考慮すると、1因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度1因子を仮定して主因子法による因子分析を行い、表5に示した。8項目間の内的整合性については α 係数が.86であり、十分信頼できる尺度であると考えられた。念のため、2因子を仮定し主因子法・オブリミン回転による因子分析を行った(表6)。回転前の2因子で8項目の全分散を説明する割合は63.61%であった。分析の結果、第2因子がOR3とOR2の2つしかなかったため、本研究ではORに対して1因子

構造とした。

4. 下位尺度間の関連および下位尺度と自己意識・自己内省尺度(辻, 2005)との相関

親の省察の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、PR得点、CR得点、OR得点とした。親の省察の下位尺度間相関を表7に示す。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。また、妥当性の検討のために、辻(2005)の自己意識・自己内省尺度の下位尺度である自己内省尺度($\alpha = .88$)、自己反芻尺度($\alpha = .88$)、内的状態の意識尺度($\alpha = .78$)との関連を見てみると、CRと自己反芻との相関を除き、PRやCR、ORは、程度の違いはあるものの自己内省や内的状態の意識と正の有意な相関を示していた(表7)。

5. 子育ての関連要因との相関

親の省察の下位尺度と子育ての関連要因との相関および自己意識・自己内省尺度と子育ての関連要因との相関を表8に示す。親の省察の下位尺度の中でCRだけが権威ある養育態度と正の有意な相関を示し、自己反芻は消極的・否定的母性意識と権威主義的養育態度と正の有意な相関を示していた。

考 察

本研究の目的は、親の省察尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討するとともに関連要因との関係を明らかにすることであった。そのために、親の省察に関する3層モデルに基づき、各領域

の省察尺度を作成し、関連要因との相関を検討した。分析の結果、各領域とも1因子構造が妥当であると考えられ、PR11項目、CR10項目、OR8項目をもって、それぞれ「親自身に関する省察尺度」、「子どもに関する省察尺度」、「他者をとおした省察尺度」とした。

親の省察尺度の妥当性の検証においては、辻(2005)の自己意識・自己内省尺度の下位尺度を用いた。Mittal&Balasubramanian(1987)によれば、私的自己意識は、自己の内的な心的過程に注意を向ける「内的状態の意識(internal state awareness)」と意識やイメージによって自己を回想・内省する「自己内省(self-reflection)」に分化する。これらに基づいて辻(2005)は「内的状態の意識」と「自己内省」をはっきり分別できるような項目と、さらに、不安や抑うつなどの病理を理解するために「内的状態の意識」とも「自己内省」とも区別される「自己反芻」項目を作成した。「自己反芻」とは、自己について同じことを反芻的に考える傾向である。

親の省察尺度のPRと「自己内省」は中程度の相関を示していた($r=.47$)。CRやORと「自己内省」は1%水準で有意ではあったが、低い相関を示していた(順に、 $r=.33$, $r=.35$)。この点は、CRやORのような省察項目は自己内省的な特徴の一部として、子育て特有のものが多く反映されているためと思われる。また、自分自身のことだけでなく、子どもを対象にして、振り返ったり、予想しておくなどの省察(CR)と、他者をとおした省察(OR)は、子どもと他人が自己の部分と混ざり合わされているだけ、純粋な「自己内省」との差が生じるのであろう。

また、今回の調査でORが「自己反芻」と中程度の相関($r=.46$)を示していたことは、興味深い結果であった。最初、子育てにおける省察尺度を作成するとき、他者をとおした省察に関する項目を設定した背景には、子育てが「孤育て」にならず地域に生きる親の支援を念頭においたことがあった。すなわち、子どもと親だけの閉ざされた空間での子育てではなく、他人との交流や助け合いを通して育児ストレス・不安が解消されると考えていた。しかし、ORと「自己反芻」の有意な正の相関から、あまり他人の子どもの育ちを意識しすぎたり、他人の子育てに注意しすぎることは、同じことをくり返し考えてしまう「自己反芻」につながる可能性

も考えられる。さらに、「内的状態の意識」については、自己の内的な心的過程に注意を向けるほど、PRやCRがより高くなるのであろう。

一方、子育てにおける関連概念と省察尺度との相関は、予想とは異なり低かった。その理由として、臨床心理学でいわれているように、省察をよく行っている親は、自己がもっている問題と理念的な自己との矛盾に気がつきやすく、そのことについて悩みやすいネガティブな側面と、論理的にそして現実と照合しながら進められるポジティブな側面の両方をもっている点が考えられる。それゆえ、積極的で肯定的な母性意識や消極的で否定的な母性意識とも高い相関を示さなかった可能性がある。しかし、CRだけは権威ある養育態度と正の有意な相関を示し($r=.33$)、子どもに関する省察を行う親は、「子どもの感情や要求に応える」ことや「子どもが間違った行動をした時、子どもと話し合い、理由を聞いたりする」などの権威ある養育態度をとっているといえる。

さらに、自己反芻は、母親役割への消極的・否定的な意識および権威主義的養育態度と有意な正の相関(順に、 $r=.44$, $r=.46$)を示していた。自己反芻は、自己について同じことを繰り返し考え、悩みや心配を増幅し、不安や抑うつなどネガティブな情動を強めていく(辻, 2005)ことから、「子どもを育てることが負担に感じられる」などの消極的・否定的な母性意識と相関が高いと考えられる。このような育児ストレスによって、子どもの反応に応じて柔軟に対処法を変えることができなく、子どもが自分に従うことを高圧的に要求する権威主義的養育態度(小島・森下, 1991)をとる可能性が高いといえるだろう。

本研究では、調査の対象になった母親の数が少なかったが、親の省察尺度と自己内省・自己意識尺度との間に示された有意な相関は尺度の妥当性を裏付けていると考えられた。一方、各尺度を2因子構造と仮定して因子分析を行った結果では、いずれも短い時間の幅に関して行われる短期的な省察と、長い時間の幅に関して行われる長期的な省察とに分かれる可能性が見出された。たとえば、PRの第1因子とCR、ORの第2因子は、子育てにおける自分の長所・短所について考える項目と、子どもの変化と本質に関する項目、子ども観と子育て観に関する項目、の負荷量が上位を示し、PRの第2因子とCR、ORの第1因子は、子どもや他人とのより直接

的なやりとりに関するものが多かった。本研究では、当初想定した3つのレベルには至らなかったものの、省察には行為途中の省察 (Schön, 2001) と、行為後の省察の2つのレベルが含まれているかもしれないと考えられる。今後、省察の質の違いが反映されるよう、1因子の寄与率が23.35%と低く十分な信頼性を示さなかった「子どもに関する省察」尺度を中心に、質問項目をさらに洗練させる必要がある。また、省察過程を支えるような条件についてさらに検討していくとともに、省察尺度の分析結果に基づいてモデルを修正していくことが求められるであろう。

引用文献

- 新井邦二郎・高野清純・庄司一子・丹羽洋子・藤生英行・浜口佳和・尹熙奉・小林真・広田信一・谷島弘仁 1993 新しい視点からの親子関係尺度の作成と検討 筑波大学心理学研究, 15, 133-146.
- Fonagy, P. 1996 The Significance of the development of metacognitive control over mental representations in parenting and infant development. *Journal of clinical psychoanalysis*, 5(1), 67-101.
- 小島秀夫・森下正康 1991 自動心理学への招待 [改訂版] —学童期の発達と生活— サイエンス社.
- 窪田庸子 2002 母親のメタ認知促進による母娘関係の改善 金沢大学大学院社会環境研究, 7, 47-57.
- Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings and directions for future research. J. Stevenson-Hinde, & C. Parkes, P. Harris (Eds.) *Attachment Across the Lifecycle*, New York: Routledge.
- Mittal, B., & Balasubramanian, S. K. 1987 Testing the dimensionality of the self consciousness scales. *Journal of Personality Assessment*, 51, 53-68.
- 宮内佳緒里 1998 省察過程における保育者の意識について 日本保育学会第50回大会発表論文集, 604-605.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.
- 朴信永・杉村伸一郎 (2006). 子育てにおける親の省察モデルの検討 広島大学大学院教
- 育学研究科紀要第三部, 55, 373-381.
- Schön, D. A. 2001 佐藤学・秋田喜代美 (訳) 専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える— ゆみる出版.
- 高橋勝子 (1998). 保育の場における保育臨床性と発達援助のあり方を探る 日本保育学会第51回大会発表論文集, 578-579.
- 戸田順恵子 2000 母親の育児ストレスと幼児の気質及び養育態度との関係について 北海道教育大学紀要, 50(2), 35-45.
- 辻平治郎 2005 森田療法における自己意識・自己内省の概念と測定 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 2 ナカニシヤ出版, pp.119-134.
- 安見克夫・秋田喜代美・鳥井亜紀子・小林美樹・寺田清美 1997 1年間の保育記録の省察過程 (1). 日本保育学会第50回大会発表論文集, 280-281.
- 吉村香・吉岡晶子・尾形節子・田代和美 1996 保育者の成長における実践と省察 日本保育学会第49回大会発表論文集, 112-113.

謝辞

調査にご協力頂いたお母さま方ならびに幼稚園の先生方に深く御礼申し上げます。また、質問項目の作成段階で呉大学若林紀乃先生、川崎医療短期大学樟本千里先生から貴重なコメントを頂きました。記して感謝の意を表します。